

上海南京路大德珠寶行

D01.03  
II  
18238

89

DA 03  
H

登 録	昭和 53. 8. 3 年 月 日
番 号	第 18238 号
社 団 法 人	土 木 学 会
附 属	土 木 図 書 館



工學博士 廣井勇傳

公威





*J. Hiroi*

ゲーテの詩句を博士が扇子に自書したるもの



現在保存せられてゐる廣井博士の書齋



# Chapter I

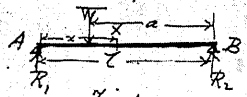
## Simple Girders

Girders simply supported at both ends are called simple girders.

The determination of forces acting on a simple girder rests on the fundamental principle of statics, viz: That among forces in equilibrium

$$\begin{aligned} \Sigma \text{ Vert. forces} &= 0 \\ \Sigma \text{ Horiz. } &= 0 \\ \Sigma \text{ Moments} &= 0 \end{aligned}$$

In the girder of Fig 1, acted on by a single load  $W$ , it will be evident that  $W$  has to travel to A & B where they produce reactions  $R_1$  &  $R_2$  resp. The first



condition of equilibrium requires that

$$R_1 + R_2 - W = 0$$

by making all unknown forces positive. These are all the external forces.

From the III condition of Equil, the algebr. sum of moments of all these forces <sup>taken about any pt.</sup> must be equal to zero at any point. Thus in order to find the values of  $R_1$  &  $R_2$  we have but to take moments, by choosing the origins in such a way that there will be but one unknown quantity in the Equation i.e. at B & A successively).

$$R_2 l - W a = 0 \quad \text{from which } R_2 = \frac{a}{l} W$$

$$R_1 l - W(l-a) = 0 \quad \text{" " } R_1 = \frac{l-a}{l} W$$

The action of these external forces consists in bending & shearing the girder.

Shear — The resultant action of vertical forces acting at any section of the girder is called the shear.

上海港改良技術會議に於ける廣井博士及各國代表委員と其サイン(大正十年)



*H. M. Black*

*F. Salucci*

*K. Herwig*

*B. J. W. P. Rio*

*S. G. Hornell*

*H. von Heideck*





トマト畑に於ける博士(大正十一年)







小樽公園東山の博士胸像

## 序

故東京帝國大學名譽教授正三位勳二等工學博士廣井勇君昭和三年十月一日ヲ以テ薨去セラル

君南海土佐ノ地ニ生レ年齒僅カニ十一歳ニシテ單身笈ヲ負フテ東都ニ出テ奮闘努力螢雪ノ苦ヲ積ムコト多年終ニ札幌農學校ニ入り其業ヲ卒ルヤ更ニ渡米ノ雄志ヲ抱キ苦辛經營僅々二ケ年ニシテ茲ニ遊學ノ資ヲ蓄ヘ明治十六年ヲ以テ米國ニ渡リ河川港灣鐵道橋梁等ノ實地ヲ研究シ更ニ獨逸大學ニ入り深ク心ヲ學理ノ探究ニ潜メ以テ其得タル所ヲ實地ノ經驗ニ參照シ側ラ英佛諸國ヲ巡歴シ常ニ智見ヲ弘メ抱負ヲ大ニス左在留六年ニシテ歸朝シ直ニ札幌農學校ノ教授ニ任セラレ次テ東京帝國大學ノ教授トナリ

子弟ヲ薰陶スルコト三十餘年其平生已ヲ持スルヤ嚴ニシテ人ヲ持ツヤ寛  
温厚ノ風貌篤實ノ資性能ク同門ノ子弟ヲシテ愛慕慈父ノ如クナラシム如  
之博士ガ高邁ナル識見ト豊富ナル獨創トハ屢々築港橋梁河川水力電氣等  
ノ實地ニ現ハレ更ラニ又波浪波力橋梁力學セメント等ニ關スル四十有餘  
種ノ著書トナリ論文トナリ日本土木工學ノ重鎮トシテ其雄名ヲ歐米學者  
ノ間ニ賞揚セラル、ニ至レリ

君ノ忽焉トシテ薨去セラル、ヤ君カ生前ノ人格識見學殖ヲ敬慕シ又多年  
ノ薰育ノ恩義ヲ感謝スル者相謀リテ故博士記念事業會ヲ組織シ胸像建設  
傳記編纂工學辭典編輯獎學資金設定等ノ計畫ヲ樹テ曩ニハ博士ノ心血ヲ  
注キテ築港ヲ完成セラレタル小樽港ニ胸像ノ建設ヲ終ヘ今又茲ニ博士ノ  
偉業風格ヲ追憶スルノ記念トシテ傳記編纂ノ舉ヲ完了セリ

想フニ博士ノ卓越セル遺業功績ハ長ヘニ不滅ノ好鑑ヲ遺シ其勇剛ナル氣  
象崇高ナル人格ハ能ク後世ノ範タラシムルニ足ルト謂フ可シ茲ニ故博士  
ヲ追懷シ序文トス

昭和五年九月

東京帝國大學名譽教授工學博士 中山秀三郎

## 記念事業會ノ顛末

曩キニ廣井博士ノ卒然トシテ薨去セララル、ヤ技術卓越學識深遠人格崇高世ニ傑出セル偉人トシテ人皆惜マサルハ莫シ斯ニ於テ朋友門人胥謀リ博士ノ功績ヲ後世ニ傳ヘント欲シ其發起人總代ニハ古市男爵ヲ推シ中山秀三郎ヲ委員長ニ名井九介井上範ヲ副委員長トシ數十名ノ實行委員ヲ選ミ檄シテ記念資金ヲ募集セリ爲メニ朋友門人ハ勿論嘗テ博士ノ高德ニ浴シタルモノ等應募ノ出資極メテ多ク近來稀ニ見ル巨額ニ達セルヲ以テ左記各項ノ事業ヲ遂行セリ

其ノ一ハ博士生前ヨリ懸案ナリシ銅像建設ナリ特別委員ニハ池邊稻生君伊藤長右衛門君小川敬次郎君古藤猛哉君神保金衛君濱野直義君三浦宇三

郎君ヲ煩シ銅像製作ハ東京美術學校教授水谷鐵也君ニ依囑シ建設ノ場所ハ北海道小樽公園ヲ選ミタリ昭和四年十月十二日博士夫人令嬢令孫等臨席ノ上嚴肅ニ除幕式ヲ舉行セリ猶記念トシテ水谷教授製作ノ博士小胸像ヲ廣井家ニ贈呈セリ

其ノ二ハ博士逝去ノ日迄盡サレタル英和工學辭典ノ編纂ナリ其後那波光雄君草間偉君永山彌次郎君ト中山秀三郎ハ博士ノ遺志ヲ尊重シ其編纂ヲ繼續セシヲ本事業會ハ之レヲ引繼キ以上諸氏ヲ中心トシ尙新タナル委員ノ推選ヲ中川吉造君八田嘉明君物部長穗君ニ囑託シ其推薦ニヨリ更ニ三十一名ノ委員ヲ加ヘ委員諸氏ノ努力ニヨリ博士一周年ヲ期シ原稿ヲ纏メ得タリ其後村瀨花之亮君ニ其整理ヲ依托シ昭和四年十二月之レヲ終了シ翌五年一月丸善株式會社ト出版契約ヲ爲シ今ヤ印刷ヲ終ラントス

發刊ノ上ハ同辭典版權ト金貳千圓トヲ土木學會ニ寄附シ時代ノ要求ニ從ヒ之レカ改訂其他適當ナル處置ヲ講スル事ヲ依囑シ其承認ヲ得タリ其ノ三八博士ノ傳記編輯ナリ其ノ特別委員トシテ選ハレタルハ池邊稻生君岡田虎輔君山崎匡輔君吉村惠吉君ナリ而シテ其編輯ニ要スル材料蒐集ヲ岡崎保吉君ニ依囑シ同君ハ故博士ノ知友門下ヲ歴訪シ或ハ自ラ北海道其他ニ出張シ親シク資料ヲ搜リ猶委員ノ手ニテ集メタルモノヲ加ヘ原案ヲ作製シ特別委員諸氏ノ嚴密ナル推敲ニヨリテ茲ニ此傳記ヲ完成セリ其ノ四ハ博士記念ノ研究資金ノ調達ナリ先キニ一般記念資金ノ募集ニ關シ特別委員トシテ安部邦衛君池邊稻生君伊藤長右衛門君君島八郎君後藤佐彦君榛葉孝平君杉本好太郎君田中豐君中村秀太郎君福田次吉君平山復二郎君ヲ煩ハシタル處幸ヒニ應募セル金額極メテ多額ナリシヲ以テ記念

事業中ノ第一ヨリ第三ニ至ル諸費ヲ支出スルモ尙博士ノ記念研究資金トシテ金貳千圓ヲ北海道帝國大學ニ寄附シ更ニ帝國五分利附公債額面壹萬五千圓ト若干ノ現金トヲ東京帝國大學ニ寄附シ得ルニ至レリ故博士ノ傳記ハ編輯漸ク成リ茲ニ刊行スルニ至レルヲ以テ上記記念事業實行ノ顛末ヲ略敘シ謹ミテ事業ヲ援助セラレタル諸家ノ好意ニ對シ深甚ナル謝意ヲ表ス

委員長 中山秀三郎

副委員長 名井九介

副委員長 井上 範

昭和五年九月



## 舊友廣井勇君を葬るの辭

内 村 鑑 三

茲に私の同窓同級の友廣井勇君は永き眠りに就かれました。私は君の遺骸に對し感慨無量であります。君は其妻に對し眞實なる夫でありました。其子に對して慈愛深き父でありました。早く其父を失はれて、其老いたる母に對して優しき従順なる子でありました。其友に對して信頼すべき友でありました。そして其上に其職務に對して最も忠實なる人でありました。君は明治大正の日本が生んだ大土木工學者中の一人でありまして、殊に築港の學と術とに於ては世界的權威でありました。君は何れの方面より見ても偉大なる人でありました。私は君の如き人を私の同窓同級の友として持ちし事を誇りとし、又君と淺からぬ友誼的關係を一生涯を通して續け得し事を感謝します。

私供は今の日本に人物缺乏せる事を常に云ひ聞かせらるゝのであります。まことに私供の周圍を見て、私供は詩人と共に歎ぜざるを得ないのであります。

神よ助け給へ、そは神を敬ふ人は絶え、誠ある者は人の子の中より消失せたり。

と。(詩十二篇)然し乍ら凡てが暗黒又は失望ではないのであります。神は何れの時代に於ても眞理の

證明者を世に残し給ひます。そして廣井君の如きが其顯著なる一人であります。廣井君は大なる建築家でありましたが單の建築家ではありませんでした。工學と言へば今の世にありては、最も割の好い、富を作るに最も便宜なる技術と思はれますが、我が廣井君にとりては、君の専門は斯る淺ましき目的を達する爲のものではありませんでした。君は其生涯に於て大工事を數多成就されましたが、それが爲に君自身の爲に得し處は算ふるに足りませんでした。君の此住宅其物が此事の善き證據であります。此質素なる家は、小樽、釧路、函館、留萌、其他の大築港を施されし大土木學者の住家とは思はれません。自家の産を作るに最も好き機會を持たれた君は、其機會を自分の爲に用ひませんでした。廣井君在りて明治大正の日本は清きエンジニアを持ちました。日本はまだ全體に腐敗せりと云ふ事は出来ません。日本の工學界に廣井勇君ありと聞いて、私供は其將來に就き大なる希望を懷いて可なりと信じます。

清廉にして寡慾なりし君は其仕事に忠實なりしは云ふまでもありません。君が札幌農學校を卒業した後、間もない事でありました。君は君の先輩の指揮の下に、北海道鐵道の線路に當る或る小なる橋梁の建築を擔任させられました。君は君の當時の工學的知識の全部を絞りて其任に當りました。そして漸くにして橋は成りて列車の試運轉が行はれんとせし時、君は顔色蒼ざめ、四肢震ひて、憂慮に堪

えざるものがあり、列車の無事通過を見て安心して胸を撫下したと聞きました。私は其當時、君と宿所を同うし、君より直に其實験を聞きまして、君の技術の最初の成功を祝したのであります。即ち廣井君には其事業の始めより鋭い工學的良心があつたのであります。そして其良心が君の全生涯を通うして強く働いたのであります。『我が作りし橋、我が築きし防波堤が凡ての抵抗に堪え得るや』との深い心配があつたのであります。そして其良心其心配が君の工學をして世の多くの工學の上に一頭地を抽んでしめたのであります。君の工學は君自身を益せずして國家と社會と民衆とを永久に益したのであります。廣井君の工學は基督教的紳士の工學でありました。君の生涯の事業はそれが故に殊に貴いのであります。

私は廣井君と同時に基督信者となりし名譽を有します。今より丁度五十年前、明治の十年六月二日北海道札幌に於て、私供青年六人は米國宣教師エム・シー・ハリス氏よりバプテスマを受けました。廣井君は其當時殊に信仰に燃えまして、日曜日毎の我等の小なる集會に於て君の教理研究の結果を我等に供して我等の信仰を助けられました。まことに一時は君自身が傳道師になられて、不肖私が今日居るべく餘儀なくせられし地位に君が立たるゝのではあるまい乎と思はれた位でありました。然し君に降りし神の命は他に在つたのであります。君は傳道師に成られずして土木學者になられました。そ

して君は一日正直に其理由を私に語られました。『此貧乏國に在りて民に食物を供せずして宗教を教ふるも益尠し、僕は今より傳道を斷念して工學に入る』と。私は白狀します。君の此告白は私の若き心に強き感動を起しました事を。私はその時思ひました。『若し廣井が傳道を止めるならば我等の仲間の中より誰か起つて其任に當らなければならぬ。自分は嫌である、さて如何したならば宜からう』と。そして後に至りて種々の止むを得ざる事情よりして、私が廣井君に代りてキリストの福音を我國に唱へざるを得ざるに至り、其困難の多きを味うて、時には舊友を怨まざるを得ませんでした。然し乍ら神は凡てを知り給ひました。廣井君が工學に入りしは君にとりて最善の事でありまして、そして又私が傳道に入りしは私に取り最善の事でありました。竟る所、廣井君も私も青年時代に相互に對し誓ひし誓約を守る事が出来たのでありまして、感謝此上なしであります。

斯くして廣井君は傳道を斷念して宗教に就ては沈黙の人となられました。君は滅多に教會にも出席せず、又人に對ひて信仰を説かれませんでした。或は君の同僚にして君のクリスチャンたる事を知らない人もある乎も知れません。然し乍らです、一度は自身傳道師たらんとまでに決心せられし廣井君は終生信仰を棄つる事は出来ませんでした。宗教は君の靈魂の深い處に堅い地位を占めました。君は常に人生の最大問題に就いて考へられました。そして常に神と其獨子イエスキリストとを敬はれまし

た。斯くして廣井君は其心の奥底に於て工學博士であるよりも寧ろ堅實なるクリスチャンでありました。私供君の友人は克く此事を知つてゐました。そして君の生涯の友なる妻は誰よりも善く此事を知つてゐました。君は私供と一緒に五十年前に學びし祈禱の習慣を死ぬまで忘れませんでした。君は毎朝毎夜、戸を閉ぢて、夜は燈を消して祈禱に従事しました。そして幾度となく祈禱の跡に涙の雫の残るのを見たとき主婦の方は語られました。そして此隠れたる信仰、一時は福音の戦士たらんとまで決心せし此神に對する信仰が、君が成し遂げし凡ての大事業を聖めたのであります。君は言葉を以てする傳道を斷念して事業を以てする傳道を行はれたのであります、小樽の港に出入する船舶は、かの堅固なる防波堤によりて永久に君の信仰を見るのであります。廣井君の信仰は私の信仰の如くに書物には現れませんでした、それにも遙かに勝りて、多くの強固なる橋梁、安全なる港に現れてゐます。君は實に恵まれたる人であります。

然し乍ら人は事業でありません、性格であります。人が何を爲した乎は神より賜はりし才能に由るのであります、彼自身で之を定めるではありません。西洋の諺に『詩人は生る』と云ふのがありますが、詩人に限りません、工學者も傳道師も天然學者も政治家も凡て『生る』であります。廣井君が工學に成功したのは君が天與の才能を利用したに過ぎません。然し乍ら如何なる精神を以て才能を利

用せしか、人の價値は之に由つて定まるのであります。世の人は事業に由つて人を評しますが、神と神に依る人とは人に由つて事業を評します。廣井君の事業よりも廣井君自身が偉らかつたのであります。日本の土木學界に於ける君の地位は是が爲に貴かつたのであります。廣井君は君の爲人を君の天與の才能なる工學を以つて現したのであります。工學は君に取り附帶性アテンションナルのものでありまして、君自身は君の工學以上でありました。そして我等君の友人にとりては君の性格、君の爲人、即ち君自身が君の工學又は工業よりも遙かに貴かつたのであります。そして今や君が君の肉體の衣を脱棄て、君の單純なる靈魂を以て神の聖前に立ちて、君は工學博士としてにあらす、單純謙遜なる基督信者として立つたのであります。君の貴きは此處にあるとして、君の事業の貴き所にも亦茲にあるのであります。事業の爲の事業にあらず、勿論名を擧げ利を漁る爲の事業に非ず『此貧乏國の民に教を傳ふる前に先づ食物を與へん』との精神の下に始められた事業でありました。それが故に異彩を放ち、一種獨特の永久性のある事業であつたのであります。

廣井勇君は今其意義ある生涯を終りて世を去られました。君の同級同信の友にして、藤田九三郎君第一に逝き、足立元太郎君と高木玉太郎君と之に次ぎ、今又君が其後を逐ふて逝かれました。残るは宮部金吾君と新渡戸稻造君と私との三人であります。之を思つて淋しさに堪えません。私供五十年前

に高貴ノブナクなる生涯を誓ひて共に學窓を出でました。そして神の御導きの下にそれぞれ其誓約に叛かざりし事を感謝します。爲した事業の多少上下には差はありましたが、其賤しからざりし點に於ては當代の日本人中、何人にも譲らない積りであります。そしてそれには理由があつたのであります。私供は聖書を以てイエスキリストの御父なる眞の神を知るを得ました。是が私供の性格の根底を築いて呉れました。そして是に根ざされて私供は世と共に移らざるを得たのであります。教育の基礎は茲に在ります。其意味に於て私供は新日本が施し得る最善の教育を受けたのであります。基督教のバイブルと人の手に觸れざりし北海の天然と、それが廣井君と私供君の友人とを育て、呉れたのであります。

【棺に向ひて】

廣井君の靈に告げます。僕は茲に君の依囑に従ひ君の葬儀を行います。君は僕よりも一年の年少者でありて僕の葬儀に列すべきであつて僕に葬儀を行はしむべきではありませんでした。然し神の命です、僕は謹んで約束を履行します。茲に五十年間の友誼を謝します。然し僕等の友誼は是れで終るのではないと信じます。Over thereであります。河の彼方に於て繼續せらるゝのであります。我等は勿論再會を期します。其時まで暫時サヨナラ。君の靈魂の我等の父なる神に在りて永久に安らかならん事を祈ります。(昭和三年十月四日告別式に於て朗讀せしもの)

# 工學博士 廣井 勇傳 目次

## 第一章 廣井博士の生涯 ..... 一三〇

- 一 搖籃 ..... 一
- 二 年少時代 ..... 二
- 三 少年立志時代 ..... 八
- 四 片岡家の書生となる ..... 一一
- 五 札幌農學校時代 ..... 一七
- 六 技術者としての首途 ..... 二七
- 七 衣食を節して渡米を敢行 ..... 三〇
- 八 米國より獨逸へ留學 ..... 三四
- 九 札幌農學校教授時代 ..... 三八
- 一〇 北海道に於ける事業 ..... 四二

- 二 東京帝國大學教授時代 ..... 五七
- 三 土木工學者としての事業 ..... 六四
- 三三 教授引退及其後 ..... 七五
- 三四 物質的生活と陰徳の數々 ..... 八五
- 三五 永 眠 ..... 九一
- 三六 信 仰 ..... 九三
- 三七 家庭生活 ..... 九八
- 三八 書生の養成 ..... 一〇八
- 三九 住居と邸宅 ..... 一四
- 三〇 墓 所 ..... 一八

### 第二章 廣井博士の逸話

- (1) 袋だくさの後の祈禱會 (2) 乘馬の練習と牛乳 (3) 取りすました落馬振り ..... 二二一
- (4) 豪膽な乗馬振り (5) 教授は最高の使命 (6) 火事場の危急 ..... 五六

### 第三章 廣井博士の著述と書翰

- (7) 正義の前には何人をも恐れず (8) 明日を依頼しない人 (9) 馬方を叱る ..... 二〇七
- (10) 蕎麥會 (11) 慧眼 (12) 勞務を尊敬 (13) 工費の抽出 (14) 奇智 (15) 無愛想 ..... 二〇七
- (16) 浦戸港の調査 (17) 五百圓の電報爲替 (18) 酒に吞まれる門下生 ..... 二〇七
- (19) 龜の行方を見届ける (20) 技術的良心 (21) 他人の意志を尊重 ..... 二〇七
- (22) 設計ばかりが仕事ではない (23) 一流の皮肉 (24) 病院を覗く (25) 人の世話 ..... 二〇七
- (26) 師弟の情 (27) 舊情と手土産 (28) 製圖 (29) 一本の線 ..... 二〇七
- (30) エンヂニアの資格 (31) 禮儀 (32) 時代遅れの紋付と洋服の裏返し ..... 二〇七
- (33) ポケットブックを読む (34) 贈物を受けるは迷惑 (35) 宴會 (36) 軒 ..... 二〇七

- 一 廣井博士著述目録 ..... 一五七
- (イ) 定期刊行物に掲載されたる著述目録 ..... 一五七
- (ロ) 單行著書目録 ..... 一六二
- 二 廣井博士著述概要 ..... 一六三

(イ) 定期刊行物に掲載されたる著述概要 ..... 一六三  
 (ロ) 単行著書の概要 ..... 一八〇

三 書翰より見たる廣井博士 ..... 一八五

第四章 廣井勇博士年譜 ..... 二〇七

第五章 廣井博士の郷黨及祖先 ..... 二一九

一 廣井博士と野中兼山 ..... 二一九

二 廣井家の先代及系圖 ..... 二二一

廣井氏系圖 ..... 二二二

廣井遊冥翁 ..... 二二四

廣井虎之助 ..... 二二八

賢夫人廣井お勇 ..... 二三八

廣井熊之助(喜十郎) ..... 二三〇

母堂寅子夫人 ..... 二三三

追 補 ..... 二四〇

廣井勇博士傳記の再刊に就て ..... 一

傳記再刊に就て所感 ..... 三

信念と責任に生きた廣井先生を偲ぶ ..... 四

廣井勇博士銅像の建設に就て ..... 六

銅 像 除 幕 式 ..... 六

故工學博士廣井勇先生記念像建設事業事務報告 ..... 八

式 辭 ..... 一一

祝 辭 ..... 一三

附 録

參考資料目録 ..... 一〇

## 口繪目錄

- 一 編輯委員及帝大土木教室にて蒐集せる資料及び提供者名……………一
- 二 直接編輯者に談話及書面にて寄せられたる資料及氏名……………五
- 三 参考書目……………九
- 一 廣井勇博士及博士のサイン(昭和三年六月)
- 二 グレーの詩句を博士が扇子に自書したるもの
- 三 現在保存せられてゐる博士の書齋
- 四 博士講義草稿の一部
- 五 上海港改良技術會議に於ける廣井博士及各國代表委員と其署名(大正十年)
- 六 トマト畑に於ける博士(大正十一年)
- 七 博士の書翰(明治四十五年)
- 八 博士の原稿(昭和三年)
- 九 小樽公園東山の博士胸像(昭和四年)

## 挿繪目錄

- 一 入校證書
- 二 札幌農學校入校當時の廣井博士(明治十年八月)
- 三 札幌農學校卒業當時の廣井博士(明治十四年十月)
- 四 在米中の廣井博士(ナイヤガラ瀑布に於て)
- 五 札幌農學校教授時代の廣井博士
- 六 函館港測量當時の廣井博士、前列右が博士、左は宮部金吾博士(明治二十七年七月)
- 七 小樽港防波堤の激浪(明治三十七年十二月七日)
- 八 博士還曆の際自邸の書齋にて
- 九 廣井博士の一族(大正九年一月六日)
- 一〇 廣井剛氏(大正七年)
- 一一 廣井勇剛氏(昭和四年七月)
- 一二 博士誕生の地、高知縣佐川町の遺跡



- 二三 札幌苗穂村の廣井博士住宅（明治三十年）
- 二四 牛込區仲之町の博士邸
- 二五 廣井博士告別式（昭和三年十月四日）
- 二六 多磨墓地に於ける廣井家總塋
- 二七 十川嘉太郎氏に贈りたる行燈及短歌
- 二八 古カタログを利用したる博士の名刺貼付帳の一部
- 二九 獨逸視察中に伊藤長右衛門氏に宛たる書翰
- 三〇 博士の書翰
- 三一 中村廉次氏に宛たる書翰
- 三二 山崎匡輔氏に宛たる葉書
- 三三 廣井遊冥翁行狀記
- 三四 博士の嚴父廣井熊之助氏
- 三五 博士の母堂廣井寅子氏

# 工學博士 廣井勇 傳